

講義名	近代デザイン史特講
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	火曜日 2 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	3・4 年次後期

担当教員

氏名
◎ 天貝 義教

前提とする授業、密接に関係する授業	「デザイン史」「近代装飾デザイン史」「デザイン史特講義」と内容が関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照。
授業の到達目標及びテーマ	この授業では、20世紀のモダン・アートとモダン・デザイン運動のモデルのひとつであるバウハウスのデザイン理念とその後の展開について学び、デザインの社会的価値についての理解を深めることを目的とする。
授業の概要	バウハウスの理念について、第一次大戦後のドイツにおけるバウハウスの創立と閉鎖から、第二次大戦後のドイツとアメリカ合衆国における展開にいたるまで、具体的事例にもとづいて概説する。
授業計画	<p>第1回 使用するテキストについての説明</p> <p>第2回 ヴァイマルにおけるバウハウス (1)</p> <p>第3回 ヴァイマルにおけるバウハウス (2)</p> <p>第4回 デッサウにおけるバウハウス (1)</p> <p>第5回 デッサウにおけるバウハウス (2)</p> <p>第6回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革 (1)</p> <p>第7回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革 (2)</p> <p>第8回 バウハウスの閉鎖とバウハウス人たちのアメリカ移住</p> <p>第9回 モホイ・ナジのニュー・バウハウス</p> <p>第10回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (1) ウルム造形大学</p> <p>第11回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (2) 具体芸術と外的環境形成の理論</p> <p>第12回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (3) インダストリアル・デザインの概念</p> <p>第13回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ (1)</p> <p>第14回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ (2)</p> <p>第15回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	配布テキストならびに紹介した参考図書にもとづいて予習と復習をおこなうことが必要である。
評価方法	授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	配布したテキストをもとに、専門用語(日本語ならびに外国語)について理解を深めておくことが必要である。
テキスト	授業時に配布する。
参考書・参考資料等	テキスト以外の参考資料・図書は授業において適宜紹介する。

講義名	デザイン史
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	水曜日 1 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	1・2 年次後期

担当教員

氏名
◎ 天貝 義教

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」「デザイン史特講」「近代装飾デザイン史」「近代デザイン史特講義」と内容が関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照。
授業の到達目標及びテーマ	産業革命以降のヨーロッパ、アメリカ、日本などのデザインに関する基礎的な知識を理解するとともに、その歴史を学ぶことによって、デザインについての基礎概念を身につけることを目指す。
授業の概要	この授業では近代デザインの画期的な歴史的事項を概説するとともに、それらの背景にある主要なデザイン理論からデザインの基礎的な概念をとりあげて平易に解説する。
授業計画	<p>第 1 回 デザイン史を学ぶ意義について</p> <p>第 2 回 産業革命における技術革新と造形意識の変化</p> <p>第 3 回 芸術と産業 (1) : 万国博覧会と近代デザイン</p> <p>第 4 回 芸術と産業 (2) : モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動</p> <p>第 5 回 芸術と産業 (3) : ウィーンにおける応用美術の振興</p> <p>第 6 回 歴史主義からの脱却 : アール・ヌーヴォーとセセッション運動</p> <p>第 7 回 様式主義から規格化へ : ドイツ工作連盟の設立とその理念</p> <p>第 8 回 1920年代の動向 (1) : バウハウスの設立</p> <p>第 9 回 1920年代の動向 (2) : バウハウスの発展</p> <p>第 10 回 1920年代の動向 (3) : 近代デザインとモダン・アートの交流</p> <p>第 11 回 アメリカにおける近代デザイン : ビジネスとしてのデザインの発展</p> <p>第 12 回 第二次世界大戦前の日本 : 応用美術と意匠図案の国家的振興</p> <p>第 13 回 第二次世界大戦後の日本 : 戦後の復興と近代デザイン理念の普及</p> <p>第 14 回 ポスト・モダニズム以降 : デザイン概念の拡張とデザインのモラル</p> <p>第 15 回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	教科書ならびに参考書を熟読し、予習と復習をおこない、講義内容の理解を深める。
評価方法	授業への取り組み (40%)、レポート (60%) を基本に総合的に評価し、60 点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	教員免許状取得のための選択科目。
テキスト	阿部公正『増補新装 カラー版 世界デザイン史』美術出版社
参考書・参考資料等	出原栄一『日本のデザイン運動—インダストリアルデザインの系譜』ペリかん社

講義名	西洋美術史
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	水曜日 2 時限
授業科目区分	選択科目
履修区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
配当年次・学期	1・2 年次後期

担当教員

氏名

◎ 天貝 義教

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」と関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照
授業の到達目標及びテーマ	古代ギリシアから二十世紀にいたるまでの西洋美術を特徴づけるもののひとつとしてパースペクティヴ (Perspective) がある。パースペクティヴの考え方はルネサンス期に確立したが、二十世紀にいたって批判の対象となった。本講義では、ルネサンス、バロック、十九世紀、二十世紀におけるパースペクティヴに関わる主要な作家の議論と作品を取り上げ、西洋美術におけるパースペクティヴの歴史的意義とともにその今日的意義を探る
授業の概要	本講義では、15世紀のL. B. アルベルティ、バロック期のアンドレア・ポツォ、19世紀初頭のJ. M. W. ターナー、20世紀前半のエル・リシツキーらによるPerspectiveに関する主要な議論を順次取り上げて、壁画・天井画・タブロー画・空間形成におけるPerspectiveの意義の変化を概説してゆく。
授業計画	<p>第1回 はじめに Perspectiveとは何か。 「視的ピラミッド」と「その切断」とは何か。</p> <p>第2回 ルネサンス期のイタリアにおけるPerspectiveの成立 (1) L. B. アルベルティの『絵画論』以前</p> <p>第3回 ルネサンス期におけるPerspectiveの成立 (2) L. B. アルベルティの『絵画論』</p> <p>第4回 ルネサンス期におけるPerspectiveのイタリアにおける広がり</p> <p>第5回 ルネサンス期におけるPerspectiveの探求 (1) ピエロ・デラ・フランチェスカを中心に</p> <p>第6回 ルネサンス期におけるPerspectiveの探求 (2) イタリアから北方へ アルブレヒト・デューラーを中心に</p> <p>第7回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (1) ローマにおけるアンドレア・ポツォを中心に</p> <p>第8回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (2) ローマからウィーンへ</p> <p>第9回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (3) 天井画の伝統 イタリア・ジェノバを中心に</p> <p>第10回 19世紀初頭におけるPerspectiveの展開 Perspectiveの理論家としてのターナー</p> <p>第11回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (1) エル・リシツキーの空間デザイン 想像上の空間へ</p> <p>第12回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (2) フランスのフォービズムとキュビズム</p> <p>第13回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (3) イタリアの未来派</p> <p>第14回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (4) アブストラクト・アート モンダリアンを中心に</p> <p>第15回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	各回の講義内容について、予習と復習を行なうことが求められる。
評価方法	授業への取組み (40%) とレポート (60%) を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	この授業では「視的ピラミッドの切断」など、L. B. アルベルティの絵画論、アンドレア・ポツォの教則本、J. M. W. ターナーの講義、エル・リシツキーの空間デザイン論などにみられるPerspectiveに関わる専門的な用語を使うので、これらの用語とともに、取り上げる芸術家・デザイナーについて予習しておくことが必要である。
テキスト	テキストは特に定めない。
参考書・参考資料等	アルベルティ著・三輪福松訳『絵画論』中央公論美術出版 アレクサンダー・ドルナー著・嶋田厚監訳『<美術>を超えて』勁草書房

講義名	シルクロード図像学 2
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	木曜日 3 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	3・4 年次後期

担当教員

氏名

◎ 井上 豪

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」「シルクロード図像学 1」と一部内容が関連している。
授業に関連するキーワード	シルクロード 仏教美術
授業の到達目標及びテーマ	インドに発した仏教美術はシルクロードを東へ向かい、沙漠を越えて中国に伝えられた。隊商路として栄えた西域のオアシス地帯は、多彩な文化が常に混じり合う「民族の十字路口」であった。 本講義は、前期に開講する「シルクロード図像学 1」のいわば後編として、楼蘭・亀茲などタリム盆地の仏教美術を中心に取り上げる。特に代表作例として石窟壁画に焦点を当て、個々の画題を考察しながら、背後にある仏教思想やオアシスの古代文化など、多角的な視点で古代美術の世界について解説する。
授業の概要	遺跡全体から見た古代美術のあり方、壁画の各テーマから読み取れる美術の変容や文化的背景の検証、細部描写から再現される古代風俗の姿など、複数の視点から西域美術の図像を考察する。講義には配付資料とスライドを用い、幅広い視野で古代美術を捉えていきたい。
授業計画	授業計画 第1回 ガイダンス 第2回 楼蘭王国とミーラン遺跡 第3回 古代ホータンの信仰と図像 第4回 クチャ・キジル石窟の形式と壁画 第5回 壁画の主題解釈「国王の掃依」 第6回 壁画の主題解釈「女人の供養」 第7回 壁画の主題解釈「出家の修行と在家の布施」 第8回 図像の継承～型と粉本 第9回 山岳図と本生図 第10回 天象図とオアシスの自然観 第11回 寄進者像からみたシルクロードの服飾 第12回 涅槃図とその周辺 第13回 舍利容器と骨臓器 第14回 贗作の図像学 第15回 まとめ
授業時間外の学習内容等	図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。
評価方法	試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。
履修上の注意	講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。
テキスト	内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。
参考書・参考資料等	必要に応じ講義の中で紹介する。

講義名	日本建築史 2
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	月曜日 2 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史
履修区分	選択科目
配当年次・学期	2・3 年次後期

担当教員

氏名
◎ 澤田 享

前提とする授業、密接に関係する授業	「日本建築史 1」の内容がやや関連している。
授業に関連するキーワード	構造、様式（近世）
授業の到達目標及びテーマ	全国的にも遺構数が多い。近世の建築を取り上げ、その様式、技術的な変遷を理解すると同時に、そこからその建物の建立年代を判定する能力を養う。 ・テーマ 日本古建築の様式、技術の変遷 日本古建築の建立時期の判定法
授業の概要	比較的現遺構数が多い近世の建物を対象にして、近世建築について理解を深める。すなわち近世 1：近世における建築界の動向とその建築。近世 2：寺院・神社・霊廟建築。近世 3：城郭建築（城郭建築については近世以前のものも触れる）。近世 4：住宅建築を取り上げ、詳述する。近世建築については秋田県でも数多くの遺構があることから、それらについても併せて概説する。そして建築（美術・芸術を含む）の歴史を基礎知識として身につけると共に、一つの建築を前にしてその魅力を自分なりに感じとり、それ等を正しく伝えることが出来るよう講義を行う。
授業計画	第1回 城郭建築の歴史と形態 第2回 城郭建築の技術的発展 第3回 近世の住宅（近世住宅の展開） 第4回 近世の住宅（桃山・江戸時代） 第5回 数寄屋建築（茶道の成立、書院の茶と草庵茶室） 第6回 数寄屋建築と数寄屋造の建築 第7回 霊廟 第8回 聖堂と学校建築 第9回 能舞台と劇場建築 第10回 農家建築 第11回 建築技術の発達と発展 第12回 近世の細部意匠と建立年代の判定法（墓股、木鼻の絵様線形を中心にして） 第13回 近世の細部意匠と建立年代の判定法（虹梁の絵様線形を中心にして） 第14回 建築構造（継手、仕口）について 第15回 まとめ （定期試験）
授業時間外の学習内容等	授業で習ったこと、配付された資料をもとに復習を行っておくこと。
評価方法	小レポート20%、本レポート80%で評価し、100点満点で60点以上を単位認定とする。
履修上の注意	必ずテキスト、図集を持参すること。
テキスト	自作プリント（適宜）